国語研プロジェクトレビュー
NINJAL Project Review　Vol.6 No.2 pp.35-46（October 2015）

〈共同研究プロジェクト紹介〉
基幹型：述語構造の意味範疇の普遍性と多様性

日本語と諸言語の対照研究から見えてくるもの
―プロジェクトの理論的・応用的な研究成果―

What Typological Research between Japanese and the Languages of the World Reveals: Theoretical and Applied Research Outcomes of the Collaborative Project

プラシャント・パルデシ（Prashant PARDESHI），今村 泰也（IMAMURA Yasunari）

1. はじめに

「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性」プロジェクトの研究テーマは述語構造の意味範疇に関わる重要な言語現象の一つである「他動性（transitivity）」である。角田（2009: 67）は「他動性（transitivity）とは自動詞文（intransitive sentences）との関係も含めて，他動詞文（transitive sentences）に関する言語現象一般を指す」としている。本プロジェクトでは，意味的他動性が，（i）出来事の認識，（ii）その言語表現，（iii）言語習得（日本語学習者による日本語の自動詞と他動詞の習得）にどのように反映するかを解明することを目的とし，日本語と世界の諸言語を詳細に比較・検討し，それを通して，日本語などの個別言語の様相の解明だけでなく，言語の多様性と普遍性についての研究に貢献することを目指して共同研究を行ってきた。さらに，理論研究の成果を日本語教育に還元する目的で，基本動詞の統語的・意味的な特徴を詳細に記述するハンドブックを作成し，インターネットに公開することを目標に研究・開発を進めてきた。本稿ではプロジェクトの理論的な研究成果として，言語類型論チームの研究成果の一部，応用的な研究成果として「基本動詞ハンドブック」作成チームの研究成果の一部を報告する。

2. 理論研究の成果：言語類型論チームの研究成果

言語の記述において他動性は極めて重要な概念である。日本語の他動性に関する研究は江戸時代後期の国語学者である本居春庭の『詞通路』に遡る。動詞の形態に標示される他動性は，日本語の動詞語彙の一つの特徴である。「割る/割れる」，「動く/動かす」のように，形式的には同じ語根を共有し，意味的には同じ結果事象を表すものの，片方の動詞にその結果事象を引き起こす使役者が項構造に組み込まれてあり，対をなすもう一方の動詞の項構造には使役者が組み込まれていない，いわゆる有対動詞が数多く存在することがよく知られている（その詳細と参考文献についてはパルデシ，桐生，ナロック（編）（近刊）を参照）。

2.1 研究の背景

言語類型論の分野では Nedjalkov（1969）を皮切りに有対動詞の形式的な関係，特に派生の方向における通言語的に見られる普遍性やその動機づけを追及する研究が盛んに行われる

ようになった（Kholodovich（ed. 1969），Nedjalkov & Silnitsky（1973），Masica（1976），Jacobsen（1985），Croft（1990），Haspelmath（1993），Hook（1996），影山（2000），Nichols et al.（2004），Comrie（2006），ナロック（2007），Haspelmath et al.（2014）など）。言語類型論チームでは上述の日本語と世界諸言語における有対動詞の最新の研究を踏まえ，日本語とアジアの諸言語を含む世界の約 60 言語における有対動詞の対照研究を進めてきた。対照研究に欠かせないのは一次的なデータである。データの収集にはそれぞれの言語を専門とする研究者があたり，Haspelmath（1993）の付録で挙がっている 31 対の有対動詞のデータの収集とその形式的な関係の分析を進めた。

2.2 「使役交替言語地図」の開発と公開

地理類型論における有対動詞間の派生方向の先駆的研究である Masica（1976: 57, 67）では，有対動詞を使役化型（自動詞から他動詞への他動化型派生）と非使役化型（他動詞から自動詞への自動化型派生）に分類し，言語ごとの型を地図上に表し，分布地域の境界線を示している。また，Haspelmath（1993: 105）は，有対動詞間の派生の方向の動機づけについて，Jacobsen（1985）や Croft（1990）の研究からヒントを得て，「自発性スケール（scale of increasing likelihood of spontaneous occurrence）」を提案している。この自発性スケールとは，通常，外部の力が関わらず，自発的に起こる可能性が高い出来事は，自動詞による表現が無標で，逆に，自発的に起こる可能性が低く，外部の力によって引き起こされる出来事は他動詞による表現が無標となることを示している。そして，Haspelmath は 21 言語のデータの分析に基づいて 31 対の有対動詞をそのスケール上に位置づけている（Haspelmath（1993: 104）の Table 4 を参照）。換言すれば，Haspelmath は認知的に無標な出来事は言語形式上においても無標であり，認知的に有標な出来事は言語形式上においても有標であると主張し，意味と形式の間の類像的な動機づけを支持している。

本プロジェクトでは，このような先行研究から着想を得て，収集した約 60 言語の有対動詞をデータベース化し，「使役交替言語地図」（The World Atlas of Transitivity Pairs（WATP））として公開した（http://watp.ninjal.ac.jp/）。このウェブサイトでは各言語のデータをダウンロードして利用することが可能である。

「使役交替言語地図」には MAP（地図インターフェース）と CHART（チャートインターフェース）の二つの検索方法が設けてある。以下，それぞれを図示し，その使い方を簡単に説明する。

地図インターフェースでは，本プロジェクトで収集した約 60 言語における 31 対の有対動詞の派生タイプを可視化している。自発性スケールは画面上部に表示し，表示中の動詞対はオレンジ色の背景色でハイライト表示される。図 1 では，約 60 言語の［1. 沸く / 沸かす］の動詞対の派生タイプが地図上に表示されている。

Haspelmath（1993: 104）Table 4 の上位の動詞（地図インターフェースの画面上部に表示された自発性スケールでは左側）は使役化型（形式的に自動詞のほうが無標で他動詞のほうが有標），下位の動詞（地図インターフェースの自発性スケールでは右側）が反使役化型（形

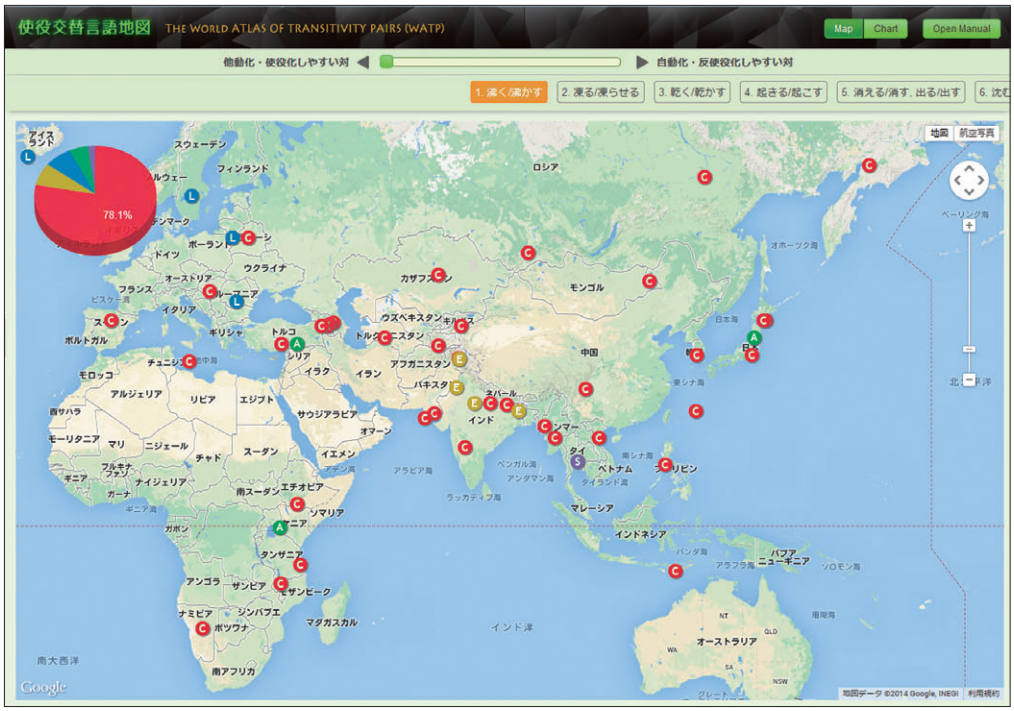

図 1 「使役交替言語地図」地図インターフェース

式的に他動詞のほうが無標で自動詞のほうが有標）となることを予想している。地図インターフェースではこの予測を検証・確認することが可能である。

チャートインターフェースでは，縦軸に言語，横軸には Haspelmath（1993）の 31 動詞対の派生タイプの分布を表示している。派生のタイプは次の 5 種類である。A（Anticausative）：自動化・反使役化型（他動詞が無標で自動詞が有標），C（Causative）：他動化・使役化型（自動詞が無標で他動詞が有標），E（Equipollent）：両極型（共通の語根から派生された自他動詞），L（Labile）：自他同形型（自他動詞ともに同じ形式），S（Suppletive）：補充型（自他動詞ともに異形）。このうち，A と C には派生の方向性があり，E, L, S にはそれがない。横軸には A/C 比および非方向性タイプの割合の合計（E＋L＋S）も示してある。また，自発性のスケールはタイルとバブルを使って視覚的に表現される。タイル表示ではある特定の動詞が当該言語で複数に翻訳可能な場合，それぞれの動詞のタイプの混合色で表示している。一方，バブル表示ではある特定の動詞が当該言語で複数に翻訳可能な場合，それぞれ別のバブルで表示している。

チャートインターフェースではそれぞれの派生タイプ（A, C, E, L, S）ごとに言語を並べ替えることが可能である。図 2 では反使役化型（A）が優勢な言語を降順で並べ替えている。「使役交替言語地図」は 2015 年 7 月 10 日現在，ユニークユーザ数は 3,695 人，ページビューは 11,059 ページで，世界各地から幅広く利用されている。

上記のネット版の成果公開に加えて，本プロジェクトでは日本語と世界の諸言語（特にア

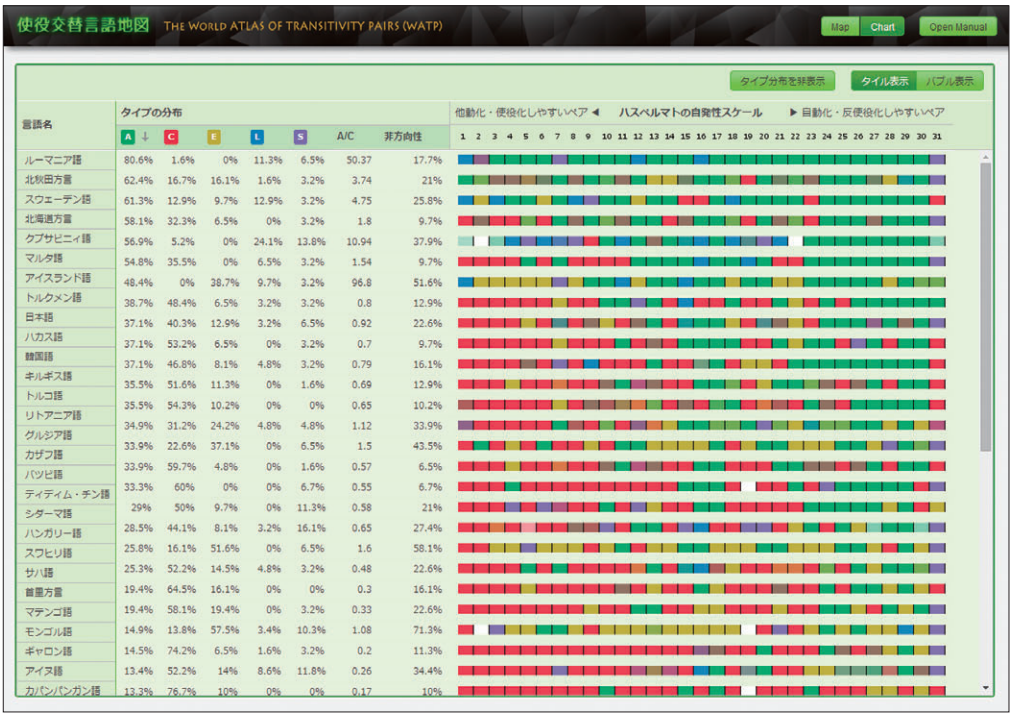

図２　「使役交替言語地図」チャートインターフェース（タイル表示）

ジア諸語）との対照研究を通じて，諸言語間に見られる類似点（普遍性）および相違点（個別性・多様性・バリエーション）を解明することによって，日本語を世界の言語の中で位置づける対照研究を進めている。この対照研究の成果をまとめた論文集『有対動詞の通言語的研究：日本語と諸言語の対照研究から見えてくるもの』(プラシャント・パルデシ, 桐生和幸, ハイコ・ナロック（編），執筆者 27 名：約 480 ページ）をくろしお出版から 2015 年 10 月頃刊行する予定である。本論集に収録された研究成果によって，日本語などの個別言語の様相の解明だけでなく，言語の多様性と普遍性についての言語類型論的な研究に貢献できると考えられる。また，日本語学をはじめとする言語研究の諸分野に学術的な貢献ができ，その波及効果は応用言語学の諸分野（特に日本語教育）にも及ぶと考えられる。

前述のように，動詞の形態に標示される他動性は，日本語の動詞語彙の一つの特徴である。本プロジェクトではハイコ・ナロック，プラシャント・パルデシ，影山太郎，赤瀬川史朗が大量コーパスデータから動詞を抽出し，453 対におよぶ包括的な「現代語自他対一覧表」を作成した。この一覧表に収録した動詞対は，(i) 形式的な関係があり，(ii) 概ね同じ出来事を表しており，(iii)「自他対」に関しては，片方の動詞に動作主・使役者に当たる項の付加または削除があることを認定したものであり，それ以上特定の意味関係に限定されたものではない。また，個人の内省・語感に基づくものではなく，辞書の記述とコーパスに基づいたものである。意味的関係が希薄化していると思われる場合，意味的対応が部分的な場合，文語または方言的なもの，片方の動詞が不安定動詞（自他両用動詞）の場合はそれぞれ記号を

付与している。「現代語自他対一覧表」には 453 対の自他動詞に加えて，自動詞同士の対（例：起きる/起こる）18，他動詞同士の対（例：含む/含める）19 も含まれている。「現代語自他対一覧表」は『有対動詞の通言語的研究：日本語と諸言語の対照研究から見えてくるもの』に収録するとともに国立国語研究所のウェブサイト（http://watp.ninjal.ac.jp/resources）でも公開する予定である。

本プロジェクトでは理論研究の成果を日本語教育に還元する目的で，基本動詞の統語的・意味的な特徴を詳細に記述する「基本動詞ハンドブック」の作成を進めている。以下，「基本動詞ハンドブック」作成チームの成果を紹介する。

3.　応用的な研究成果：「基本動詞ハンドブック」作成チームの研究成果

「基本動詞ハンドブック」（以下，ハンドブック）は日本語学習者と日本語教師が基本動詞の理解を深めることができるように，基本動詞の多義的な意味の広がりを図解なども用いてわかりやすく解説したオンラインツールである（http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/）。

ハンドブック作成チーム[1]は理論的な研究の知見を日本語教育へ還元することを目標に，言語学，日本語学，日本語教育，対照言語学，第二言語習得研究，辞書編纂学，認知言語学，コーパス言語学などといった様々な研究分野の最新の研究成果を取り入れ，日本語の自動詞・他動詞の体系的かつ効率的な学習に役立つハンドブックの作成を進めている。2014 年 4 月に一般公開を開始，2015 年 7 月 10 日現在，ユニークユーザ数は 9,301 人，ページビューは 23,845 ページで，世界各地から幅広く利用されている。

3.1　コーパス準拠の見出し執筆

ハンドブック作成チームでは，コーパスに基づいた見出し執筆を最大の目的として掲げている。その実現のため，『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）のコロケーション（共起関係）や文法的振る舞いを網羅的に表示できる検索ツール NINJAL-LWP for BCCWJ（NLB）（図 3）を開発し，執筆に役立てている。2012 年 6 月から公開し（http://nlb.ninjal.ac.jp/），2014 年 8 月に類義語などを比較するための 2 語比較機能を追加した。2015 年 7 月 10 日現在，ユニークユーザ数は 55,724 人，ページビューは 50 万ページを超え，世界各地から幅広く利用されている。

また，外国人学習者がどのような誤りを犯しやすいのかを知るために，寺村秀夫（1990）『外国人学習者の日本語誤用例集』を活用している。この貴重な言語資源を後世に残す意味で PDF 版を公開するとともに，「寺村誤用例集データベース」（図 4）を開発し，2011 年 12 月に公開した（http://www.ninjal.ac.jp/teramuragoyoureishu/）。2015 年 7 月 10 日現在，ユニークユーザ数は 8,676 人，ページビューは 14,752 ページである。

---

[1]　プロジェクトリーダーのパルデシ（国立国語研究所），砂川有里子，今井新悟（以上，筑波大学），籾山洋介（名古屋大学）を中心とする約 20 人の共同研究者がハンドブックの作成にあたっている。本稿執筆者の今村（国立国語研究所）は主に視聴覚コンテンツの開発に携わっている。オンラインシステムの設計・開発は Lago 言語研究所の赤瀬川史朗氏が担当している。

図３　NINJAL-LWP for BCCWJ（NLB）

図４　寺村誤用例集データベース

ハンドブックの執筆は，上の二つのツールを利用して見出し語となる基本動詞の統語的・意味的な共起関係，コーパスからの用例，学習者の誤用例などを随時参照しながら進めている。

3.2　ハンドブックの見出し語

ハンドブックで扱う基本動詞の選定にあたっては，タイプの異なる日本語教科書（『みんなの日本語』『げんき』『JAPANESE FOR BUSY PEOPLE』）と「計算機用日本語基本辞書 IPAL

―動詞・形容詞・名詞―」[2] を参照し，(i) 多くの教科書で扱われており，(ii) 語義の多い動詞を選んでいる。また，当該の動詞と自他の対をなす動詞（例：起きる/起こす）や方向・動作が対をなす動詞（例：行く/来る，かぶる/脱ぐ）も対象としている。

2015 年 7 月現在，57 見出しが公開されており，①意味別，② 50 音順，③全見出しの 3 種類の方法で検索できるようになっている（図 5）。

図 5　見出し語一覧（意味別（左）と 50 音順（右））

3.3　ハンドブックのコンテンツ

日本語学習者にとって使用頻度が高く多義的な基本動詞の習得は大きな課題である。ハンドブックでは基本動詞の体系的かつ包括的な学習・教育のために表記，活用，アクセント，文型，文法情報[3]，例文，コロケーション（共起語と非共起語），誤用解説，関連語（類義語，反義語，複合語），慣用表現など，様々な工夫と試みがなされている。以下，視聴覚コンテンツを中心に紹介する。

①コアイメージ

見出し語の中核的な意味をコアイメージとして図示している（図 6）[4]。

---

[2] 情報処理振興事業協会（IPA）から公開された辞書データとその解説書。動詞は基本和語動詞 861 語が収録されている。

[3] 各語義において，受身，尊敬，使役，意志，継続，結果・完了のいずれの表現が可能／不可能／あまり使われない，を示している。

[4] 田中・武田・川出（2003）『E ゲイト英和辞典』はコア（core meaning）を重要な概念として導入し，コアイメージの図示に力を入れている。

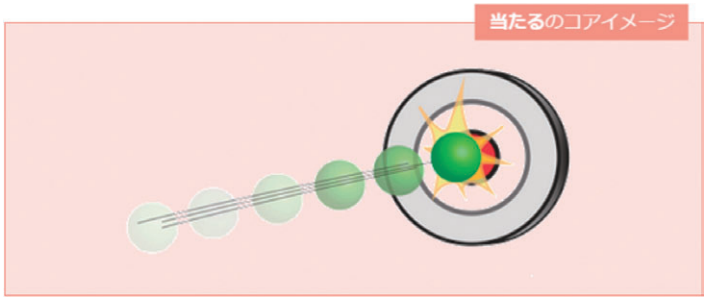

図６ 「当たる」のコアイメージ

②多義ネットワーク

基本動詞には多くの語義がある。ハンドブックでは見出し語の中心義から派生義への意味拡張を視覚化した「多義ネットワーク」を表示している（図 7）[5]。

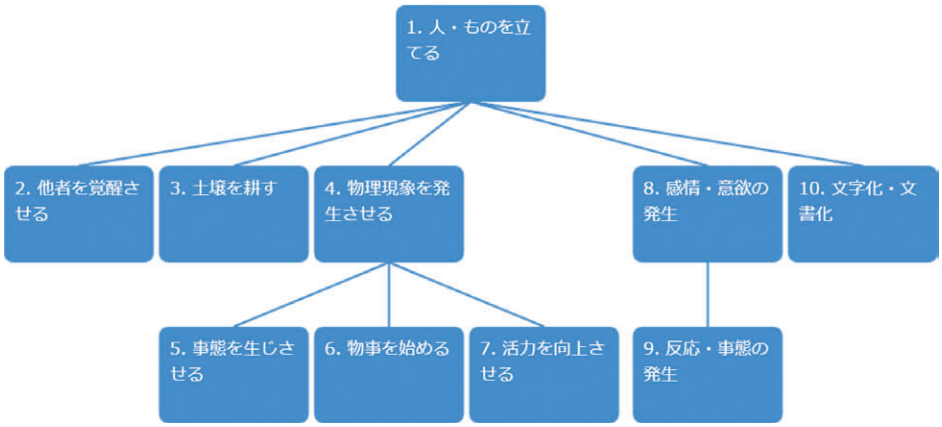

図７ 「起こす」の多義ネットワーク

③見出し語の活用形のアクセント

各見出し語について 15 種類の活用形とアクセントを表示している。可能形は現代日本語の使用実態に鑑み,「ラ抜き」も併記している（図 8）[6]。音声も用意しており, 学習者がリピートできるように各活用形の後にポーズを入れている。

④例文音声

ハンドブックでは上述のコーパス検索ツール（NLB）に基づいた作例を語義ごとに挙げている。文法的振る舞いを考慮に入れ，上級の学習者にも役立つように単文だけでなく複文も示している（図 9）。また，コーパス（BCCWJ）の用例も提示している。現在公開中の 57 見

[5] 森山（2012）『日本語多義語学習辞典　動詞編』でも同様の手法（ネットワーク図）がとられている。
[6] アクセントを調べるには「オンライン日本語アクセント辞書（OJAD）」（http://www.gavo.t.u-tokyo.ac.jp/ojad/）が便利である。動詞については 12 種類の活用とアクセントを調べることができ，音声を聞くこともできる。

出しの例文（作例）の数は 3,723 で，そのうち 35 見出しの例文（2,386）に音声が付いている（音声は全文に付ける予定）。例文音声は，(i) 例文ごとの再生，(ii) 語義ごとの一括再生，（iii）見出し語の全例文の一括再生（ランダム再生も可能）の 3 種類の再生方法を用意している。

例文のスタイル（「です・ます」調，「だ・である」調，セリフ調，会話など），動詞の活用形，文末表現はバラエティに富んでおり，例文の内容（トピック）も多岐にわたっている。また，例文の録音作業には様々な年齢層の男女約 20 人がナレーターとして参加している。

音声付きの豊富な例文はアクセント・イントネーションなどの音声，語彙や文法の学習のみならず，日本の文化や習慣の理解にも役立ち，とりわけ近くに日本語母語話者・教師がいない環境で日本語を学んでいる学習者にとっては大きな助けとなるだろう。

アクセント型	起伏型
辞書形	くる
ない形	こない
～なかった	こなかった
ます形	きます
～ません	きません
～ました	きました
～ませんでした	きませんでした
～とき	くるとき
ば形	くれば
意向形	こよう
て形	きて
た形	きた
可能形	こられる（これる）
受身形	こられる
使役形	こさせる

図 8 「来る」の活用

例文

▶ すべての例文を聞く

▶ 政治家が私利私欲に**走ってはいけない**。
▶ 太郎は今、悪の道に**走ってしまっているようだ**。
▶ 「くれぐれも不倫には**走るな**よ。」「わかってますよ。」
▶ 子供が高校を中退し、非行の道に**走ってしまった**。
▶ リストラされた同僚は、再就職せずギャンブルと酒に**走ってしまったそうだ**。
▶ 「そうやってすぐ流行に**走るの**はどうかと思うよ。」「うるさいな。」

図 9 「走る」の例文（語義 7：好ましくない傾向に傾く）

⑤ショートアニメ

見出し語の意味の理解と記憶を促進するためにショートアニメを利用し，(i) 使用場面，(ii) 動作の準備段階から完了までの流れ，（iii）コアイメージとの関連を示している（図 10）[7]。

[7] 2015 年 7 月現在，ショートアニメは「上がる」「下がる」「上げる」「下げる」の 4 見出しだけに付いているが，現在開発中で，順次ほかの見出し語にも追加していく予定である。

ショートアニメには音声と字幕も付いている。

4.　今後の展望

ハンドブックの執筆作業は現在も継続中で，半年ごとに十数見出しずつ増やしていく予定である。また，例文の数もさらに増えることから，ハンドブック全体の例文を意味機能，文型，任意の文字列でまとめて検索できる「例文データバンク」（仮称）を構築し，日本語教育の現場で活用してもらうことを計画している。

結婚披露宴でスピーチしたが

大勢の人を前にして

あがってしまった。

図 10　ショートアニメ「上がる」語義 16（緊張）

●参照文献●

Comrie, Bernard（2006）Transitivity pairs, markedness, and diachronic stability. *Linguistics* 44(2): 303−318.

Croft, William（1990）*Typology and universals*. Cambridge: Cambridge University Press.

Haspelmath, Martin（1993）More on the typology of inchoative/causative verb alternation. In: Bernard Comrie and Maria Polinsky（eds.）*Causatives and transitivity*, 87−120. Amsterdam: John Benjamins.

Haspelmath, Martin, Andrea Calude, Michael Spagnol, Heiko Narrog & Elif Bamyacı（2014）Coding causal-noncausal verb alternations: A form-frequency correspondence explanation. *Journal of Linguistics* 50(3): 587−625.

Hook, Peter E.（1996）The play of markedness in Hindi-Urdu lexical sets. In: Shivendra K. Verma and Dilip Singh（eds.）*Perspectives on language in society: Papers in memory of professor Ravindra Nath Srivastava*, 61−71. Delhi: Kalinga.

Jacobsen, Wesley M.（1985）Morphosyntactic transitivity and semantic markedness. *Chicago Linguistic Society* 21(2): 89−104.

影山太郎（2000）「自他交替の意味的メカニズム」丸田忠雄・須賀一好（編）『日英語の自他の交替』33−70．東京：ひつじ書房．

Kholodovich, A.（ed.）（1969）*Tipologija kauzativnyx konstrukciy: Morfologičeskij kauzativ.* Leningrad: Academy of Sciences of the USSR, Institute of Linguistics.

Masica, Colin P.（1976）*Defining a linguistic area: South Asia*. Chicago and London: University of Chicago Press.

森山新（編著）（2012）『日本語多義語学習辞典　動詞編』東京：アルク．

ナロック・ハイコ（2007）「日本語自他動詞対の類型論的位置づけ」『レキシコンフォーラム』3: 161−193．東京：ひつじ書房．

Nedjalkov, Vladimir P.（1969）Nekotorye verojatnostnye universalii v glagol'nom slovoobrazovanii. In: Igor' F. Vardul'（ed.）*Jazykovye universalii i lingvističskaja tipologija*, 106−114. Moscow: Nauka.

Nedjalkov, Vladimir P. & G.G. Silnitsky（1973）The typology of morphological and lexical causatives. In: Ferenc Kiefer（ed.）*Trends in Soviet theoretical linguistics*, 1−32. Dordrecht: D. Reidel.
Nichols, Johanna, David A. Peterson & Jonathan Barnes（2004）Transitivizing and detransitivizing languages. *Linguistic Typology* 8: 149−211.
パルデシ・プラシャント，桐生和幸，ナロック・ハイコ（編）（近刊）『有対動詞の通言語的研究：日本語と諸言語の対照研究から見えてくるもの』東京：くろしお出版.
田中茂範・武田修一・川出才紀（編）（2003）『E ゲイト英和辞典』東京：ベネッセコーポレーション.
寺村秀夫（1990）『外国人学習者の日本語誤用例集』大阪大学.
角田太作（2009）『世界の言語と日本語 改訂版』東京：くろしお出版.

《要旨》 述語構造の意味範疇に関わる重要な言語現象の一つが「他動性」である。基幹型プロジェクト「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性」では，意味的他動性が，（i）出来事の認識，（ii）その言語表現，（iii）言語習得（日本語学習者による日本語の自動詞と他動詞の習得）にどのように反映するかを解明することを目標に掲げ，日本語と世界諸言語を詳細に比較・検討し，それを通して，日本語などの個別言語の様相の解明だけでなく，言語の多様性と普遍性についての研究に貢献することを目指し，2009 年 10 月から共同研究を進めてきた。さらに，日本語研究の成果を日本語教育に還元する目的で，基本動詞の統語的・意味的な特徴を詳細に記述するハンドブックを作成し，インターネット上で公開することを目指して研究・開発を進めてきた。

本稿ではプロジェクトで企画・実施した共同研究の理論的および応用的な成果を概観した。理論的な成果としては，①地理類型論的なデータベースである「使役交替言語地図」（WATP），②日本語と世界諸言語の対照言語学的・類型論的な研究をまとめた論文集『有対動詞の通言語的研究：日本語と諸言語の対照研究から見えてくるもの』を紹介した。応用的な成果としては日本語教育に役立つ「基本動詞ハンドブック」の見出し執筆の方法とハンドブックのコンテンツについて紹介した。

Abstract: ‘Transitivity’ is one of the two principle types of clause structure. With a view to deepening our understanding of individual languages as well as exploring the unity and diversity underlying human languages we have initiated a collaborative project of research on transitivity based on analysis of about 40 languages around the globe including Japanese. The project aims to shed light on how semantic transitivity is reflected in (i) the construal of an event, (ii) linguistic encoding of an event and (iii) acquisition of transitive and intransitive verbs by learners of Japanese as a foreign language (JFL). A further objective is to introduce the insights of theoretical research to language pedagogy. To this end we are developing a freely accessible online handbook of polysemous basic verbs. The handbook, incorporates the insights of theoretical research on the semantic and syntactic aspects of polysemous verbs. In this paper we report on a few salient theoretical and applied research outcomes of the project. Theoretical research outcomes include: (1) the geo-typological database of lexical transitivity pairs called ‘The World Atlas of Transitivity Pairs (WATP)’ made available online (http://watp.ninjal.ac.jp/) and (2) an edited volume of research papers to be published in 2015. The outcome of our applied research on basic polysemous verbs in Japanese is also made available online (http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/).

プラシャント・パルデシ（Prashant PARDESHI）

国立国語研究所言語対照研究系教授。博士（学術）（神戸大学）。神戸大学人文学研究科講師，国立国語研究所言語対照研究系准教授を経て，2011 年 4 月より現職。

主な著書・論文：『自動詞・他動詞の対照』（シリーズ言語対照〈外から見る日本語〉第 4 巻，共編著，くろしお出版，2010），Semantic neutrality in complex predicates: Evidence from East and South Asia（with Peter Hook and Hsin-hsin Liang, *Linguistics* 50(3)，2012），The more in front, the later: The role of positional terms in time metaphors（with Kazuko Shinohara, *Journal of Pragmatics* 43, 2011），Toward a geotypology of EAT-expressions in languages of Asia: Visualizing areal patterns through WALS（『言語研究』130，2006），「「非意図的な出来事」の認知類型論：言語理論と言語教育の融合を目指して」（共著，『言語学と日本語教育 IV』，くろしお出版，2005）.

受賞：第 1 回「ことばと文化・教育」研究助成優秀賞（財団法人博報児童教育振興会，2007），The Chatterjee-Ramanujan Prize for Outstanding Student Contribution to The Yearbook of South Asian Languages and Linguistics 2000（The Yearbook of South Asian Languages and Linguistics, Sage Publications）.

今村　泰也（いまむら・やすなり）

国立国語研究所言語対照研究系プロジェクト研究員。博士（文学）（麗澤大学）。2014 年 5 月より現職。

主な著書・論文：「日本語とヒンディー語の関係節の対照研究：関係節の種類と特徴，関係節化の可能性について」（『麗澤大学紀要』87，2008），「ヒンディー語の所有表現再考：類型論的観点からの考察」（『言語と文明』7，2009），「ヒンディー語・ウルドゥー語の他動詞 rakhnaa を用いた所有表現」（『大阪大学世界言語研究センター論集』3，2010），「日本語から考えるヒンディー語の人魚構文（体言締め文）」（『日本語と X 語の対照 2』，三恵社，2012），「日本語教育の新たなツール「基本動詞ハンドブック」：オンライン辞書の 1 モデルの開発」（『ことばと文字』3，くろしお出版，2015）.

基幹型共同研究プロジェクト「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性」
プロジェクトリーダー　プラシャント・パルデシ
（国立国語研究所 言語対照研究系 教授）

プロジェクトの概要

述語構造の意味範疇に関わる重要な言語現象の一つは「他動性」である。本プロジェクトでは，意味的他動性が出来事の認識とその言語表現および言語習得にどのように反映するかを解明することを目的とする。日本語と世界の諸言語を詳細に比較・検討し，それを通して，日本語などの個別言語の様相の解明だけでなく，言語の多様性と普遍性についての研究に貢献することを目標とする。

また，理論研究の成果を日本語教育に還元する目的で，基本動詞の統語的・意味的な特徴を詳細に記述するハンドブックを作成する。本ハンドブックは日本人の正用コーパスと外国人日本語学習者の誤用コーパスを参考に執筆を行い，イラストや音声などネットの強みを生かした視聴覚コンテンツを盛り込み，インターネット上に無償公開する。